

St. Luke's International University Repository

看護大学から市民への健康情報の提供:聖路加健康ナビスポット「るかなび」の試み

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): people, health information, information service 作成者: 菱沼, 典子, 川越, 博美, 松本, 直子, 新幡, 智子, 石川, 道子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/482

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



報 告

看護大学から市民への健康情報の提供
— 聖路加健康ナビスポット「るかなび」の試み —

菱沼 典子¹⁾ 川越 博美²⁾ 松本 直子³⁾
新幡 智子⁴⁾ 石川 道子⁵⁾

Health Information Service to the People
at St. Luke's College of Nursing : A Trial of "LUKENAVI"

Michiko HISHINUMA, RN. MS.¹⁾ Hiromi KAWAGOE, RN.²⁾ Naoko MATSUMOTO, Librarian³⁾
Tomoko ARAHATA, RN.⁴⁾ Michiko ISHIKAWA, Librarian⁵⁾

[Abstract]

"LUKENAVI", is a concept describing a community-based health information service center. In May 2004, the St. Luke's College of Nursing Research Center for Development of Nursing Practice opened a LUKENAVI. The object of this article is to describe the opening process of "LUKENAVI", and then discuss the current function of the "LUKENAVI".

In the health care field there is a wide gap in health information between patients and medical staff. This information gap must be filled to achieve the goal of people-centered care. The aim of "LUKENAVI" is to provide people with this health information and especially how to access the health information and how to use the information.

"LUKENAVI" is open Monday through Friday between 10:00 to 16:00. A health coordinator or a health volunteer talks with people coming to "LUKENAVI". The resources used include books, pamphlets, blood pressure machine, scales and computer. Between May and September, 428 people came to the "LUKENAVI". Of those attending 26% came seeking advice about their health problems and 22% simply wandered into the "LUKENAVI". In addition, an informal assessment was conducted. A questionnaire was handed to many participants. Answering the questionnaire were 90 (21%) people. The majority (70%) of LUKENAVI visitors responding were women ages 40 to 70 years old. We hope that "LUKENAVI" answers the needs of people, and that "LUKENAVI" will become an area for education, practice and research.

[Key words] people, health information, information service, college of nursing
〔キーワード〕 市民, 健康情報, 情報提供, 看護大学

[抄 録]

聖路加看護大学看護実践開発研究センターでは、2004年5月に、市民に健康情報を提供する場として、聖路加健康ナビスポット「るかなび」を開設した。本論文は、「るかなび」開設までの経過、開設から5カ月間の

- 1) 聖路加看護大学 基礎看護学・形態機能学 St. Luke's College of Nursing, Fundamental of Nursing, Structure and Function of the Human Body
- 2) 聖路加看護大学看護実践開発研究センター 地域看護学 St. Luke's College of Nursing Research Center for Development of Nursing Practice, Community Nursing
- 3) 聖路加看護大学司書・看護実践開発研究センター研究支援員 St. Luke's College of Nursing Library, Research Center for Development of Nursing Practice
- 4) 聖路加看護大学看護実践開発研究センター「るかなび」ヘルスコーディネーター St. Luke's College of Nursing Research Center for Development of Nursing Practice, Health Coordinator of "LUKENAVI"
- 5) 日本医科大学図書館 司書 Nippon Medical School Library

来場者の現状の報告である。

医療の主体は病んでいる患者にあり、医療者はその回復を手助けするパートナーであるという関係を構築していくには、まず、市民と医療者間の圧倒的な情報量の差を埋めることが必要である。主体的に健康生活を創り、自分の健康を自分で守る市民社会をめざして、必要な健康情報を得る方法ならびに、健康情報の使い方に関して情報を提供することを目的に、「るかなび」を開設した。

「るかなび」は、月曜日から金曜日までの10時から16時までをサービス時間とし、スタッフとしてヘルスコーディネーターまたはヘルス・ボランティア1～2名が常在、書籍、パンフレット、血圧計、身長・体重計、コンピュータを備えている。開設から9月までの来場者は428名で、利用目的は健康相談が26%、立ち寄りが22%であった。来場者のうち、アンケートに回答を得られた90名では、40～60歳代が7割、女性が7割であった。市民が欲していることに合わせ、教育、研究にも活用できる場になるよう工夫を重ねたい。

I. 課題の背景

自分の健康は自分で守る時代といわれ、医療者には患者に対するインフォームド・コンセントが義務化された。しかし市民からみれば、病気になったとき、病気の勉強をし、治療法の勉強をし、そして自分で治療法を選び、生活を整えなさいといわれても追いつかないのが現状である。病気を理解するには、まず病気と診断された臓器の場所や働きを勉強し、その臓器に何が起こっているのかを勉強する。病んでいる臓器を理解するのが精一杯で、体全体の中でその臓器の働きをとらえ、病気による体全体への影響までを理解するには時間が必要である。断片的な知識の中で、複数の治療法の中から急いで選択を迫られる現状で、市民が主体的に判断することは果たして可能だろうか。

もともと医療は、人々を病から守り、病から回復させることを目的としているものである。しかしながら市民と医療者間の圧倒的な情報量の差は、医療を市民のものからあたかも医療者のもののように思える状況を作り出してきた。それへの反省が、いまインフォームド・コンセントを生み出し、自分の健康を自分で守ろうという動きになっている。

医療における市民と医療者の関係は、疾病構造を経済・社会状況からみた健康転換からみるとわかりやすい。健康転換は第1相を感染症が主な疾患の時代、第2相を慢性疾患が主となった時代、第3相を高齢化に伴う退行性疾患の時代としている¹⁾。感染症は治療・予防法が明確で、医療者の知識をそのまま使うことが予防・回復に効果的である。健康転換第1相では、医療者の優位性が生まれ、トップダウン型のケアモデルが有効となる。慢性病は、医療者の指示があっても感染症ほどの効果はみられない。治療に含まれる生活習慣の変更は病者に委ねられ、医療者は市民の相談役、パートナーであることが求められる。健康転換第2相は相談型、参加型のケアモデルが有効となる。高齢社会に進み、高齢者の主体性を尊重しつつ、高齢者の実際の生活を支える他者が必要にな

る健康転換第3相では、医療と福祉との連携が進められ、ケアをコーディネートするコーディネート型のケアモデル、またネットワーク型のケアモデルが生まれている²⁾³⁾。今日の日本社会の状況は、健康転換でいえば第3相であるが、2相、3相が混在していると見てよいであろう。

もう一点、日本における医療の特徴は、国民皆保険の医療制度である。病気になったら医者に行く、医者に行けばわかるはずというお任せ医療のパターンができ、そしてそこで直接支払う医療費が安いために、安価と錯覚してしまうのである。これも市民が医療を医療者に任せ、一方医療者は医療を医療者のもののようにしてきた一つの要因ではなかろうか。

21世紀の今日、医療の主体は病んでいる患者にあり、医療者はその回復を手助けするパートナーであり、ケアのコーディネーターであるという関係を構築していくには、市民も医療者も変わらなければならない。まず、市民と医療者間の圧倒的な情報量の差を埋めることが必要である。治療法を選択したり、健康生活を創っていく時の判断の材料になるには、断片的な情報から体全体を見通せる情報へ、情報の質を高めることが必要である。看護職には、適切かつ十分な情報を市民に提供し、市民が主体的に健康行動や治療法を選択する過程を共にする役割があり、この看護活動はそのまま、医療の主体を市民に戻すことへの取り組みである。医療の現場にいる看護職は、日々これに向かって努力しているが、教育研究機関では、どのような活動が可能であろうか。聖路加看護大学看護実践開発研究センターでは図書館との連携のもとに、市民に健康情報を提供する場の試みを開始したので報告する。

II. 聖路加健康ナビスポット「るかなび」の開設まで

2004年1月、看護実践開発研究センター内に市民健康情報サービス委員会が発足し、準備を開始した。委員会

メンバーは、研究センター教育部門長を委員長に、センター専任教授と職員のほか、学外から訪問看護ステーションにおけるボランティア・コーディネーターの経験者、患者図書サービスの経験のある司書の参加を得た。

準備にあたって、聖路加国際病院「さわやか学習センター」⁴⁾や東京女子医科大学「からだ情報館」⁵⁾の先行例を見学した。そのうえで、看護大学であること、小規模なスペースで行うといった要件を検討しながら、市民主体で医療情報を得る際の手助け、訪れる市民に合った情報の提供、確かな図書を選択し、手に取れるように整備し、基本的な情報をわかりやすく提供するという枠組みを設定した。「聖路加健康ナビスポット：るかなび」という名称を決定し、スペースのレイアウト、設備・備品の調達、資料の選定と収集、聖路加同窓会員に対しヘルス・ボランティアの募集を行った。

場所は本学2号館の1階で、通りに面したガラス張りのスペースを当てることにした。通りがかりの人々にわかるように、デザイナーにロゴデザインを依頼し、通りに面したガラスにロゴを貼り出した。入りやすい雰囲気をつくるために、色調の明るい家具を選んだ。また、身長計・体重計と、短時間で気軽に体を実感できることとして、看護師と一緒に血管音を聞きながら行う血圧測定を考え、2人で聞ける聴診器（以下ダブルステート）と血圧計を用意した。図書は、裏付けが明確であるもの、レファレンス・ブックとなるもの、誰もが理解しやすく明快に書かれているものを念頭に選択した。

スタッフの準備が最も困難であったが、ヘルスコーディネーター1名、ボランティア4名の参加を得て、5月に開設の運びとなった。

Ⅲ. 「るかなび」の目的と方針

主体的に健康生活を創り、自分の健康を自分で守る市民社会をめざして、必要な健康情報を得る方法ならびに、健康情報の使い方に関して情報を提供することを、「るかなび」の目的とした。「るかなび」は答えを出すところではなく、答えを見つけていく方法を提示することによって、市民が自信や力を感じられる場として機能することをめざしている。

市民が自分で適切な情報を得る方法を助ける、つまり、疑問に対する答えを提供するのではなく、知りたいことを知るために情報を得る手段、方法を提示するのである。健康情報があふれている今日の状況下において、有用な情報の見分け方は難しい。その点で医療職には、適切な情報を提示する責任がある。結論だけでなく、その結論を導く基本的情報が含まれていること、平易な表現になっていること、偏った情報でないこと、特に危険性に関して可能性を明示していること、これらの基準を満たす健

康情報に行き着けるように、アドバイスできることを目標とした。

Ⅳ. 「るかなび」の実践

1) 開設状況

月曜日から金曜日までの10時から16時をサービス時間とし、スタッフとしてヘルスコーディネーターまたはヘルス・ボランティア1～2名が常在して、相談に応じている。開設当初、終了時間を17時としたが、16時を境に来場者がなくなるため変更した。サービス時間外でも大学が開いている間は、パンフレットを見に立ち寄ることはできる。ヘルスコーディネーターは看護師・保健師であり、同窓生のヘルス・ボランティア3名（2004年10月現在）はいずれも看護師・保健師または助産師である。企業や学校で健康相談を行っていた経験があり、このことが相談業務、資料の選択などに生かされている。なお、8月はヘルスコーディネーターとヘルス・ボランティアの常駐を中止し、相談の申し込みがあった場合にヘルスコーディネーターまたはセンター研究員が対応、また大学の一斉休暇中は休止とした。

2) 情報媒体

現在、図書は152冊、無料で配布しているパンフレットは210種となっている。インターネットによる検索ができるよう、市民に開放するパソコンも用意している。これはセキュリティ面から学内LANとは別にプロバイダ契約を行った。

図書の配置は、現在のところ冊数が少ないことから、通常の図書館で使用している分類にとらわれず、市民にとって関心がある情報の項目ごとにまとめた。項目は、「るかなび」における健康相談内容と、日本医学図書館協会ワーキンググループによる「一般市民への医学・医療情報需要調査」⁶⁾を参考に設定した。①病院に関する情報、②からだ、③病気のこと（しくみ・予防・治療）、④薬のこと（効果・副作用）、⑤栄養・食べ物、⑥保健、⑦介護・福祉、⑧医療費、⑨統計資料、⑩看護師の仕事の10項目である。図書の利用は閲覧のみで貸出しは行っていない。そこで各図書に書誌事項を記載したしおりを入れ、入手したい方が持ち帰ることができるようにした。

パンフレットは、「るかなび」の目的に適したものを、医療機器メーカー、医薬品会社などへ依頼し、提供を受けている。パンフレットによっては、5カ月に100部が持ち帰られており、よく利用されている。今後は本学で作成した独自のパンフレットの配布も計画している。

3) 来訪者

5月から9月までのサービス時間内の来訪者は延べ428名である。5月は18日間で43名、6月119名、7月144名、8月43名、9月79名であった（図1）。利用目的

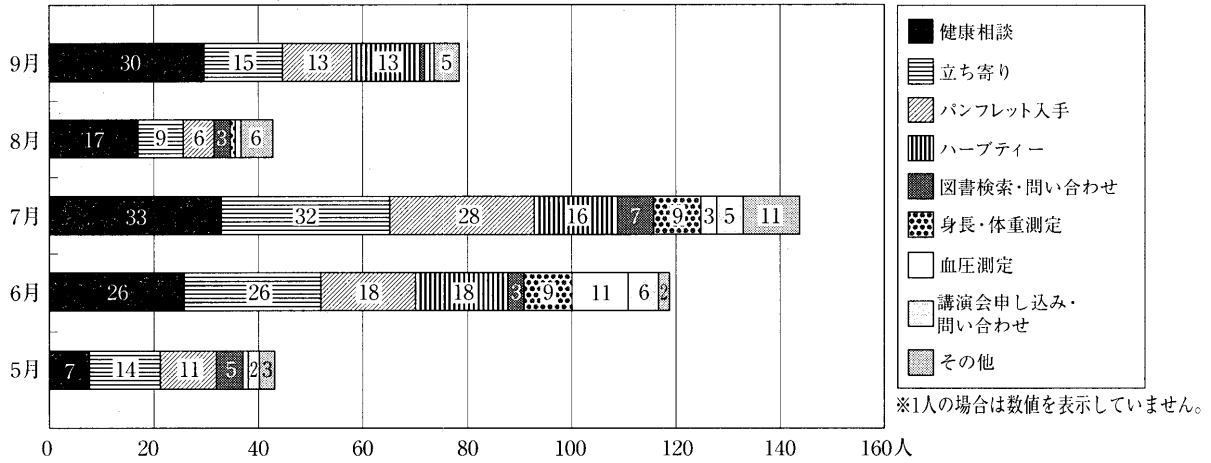


図1 「るかなび」月別来場者数 (2004.5~2004.9)

は健康相談が26%と4分の1を占め、次いで立ち寄りが22%という結果であった(図2)。来訪者のうち、アンケートへの回答者90名について、年齢は20歳代から80歳以上まで広汎にわたっており、50歳代が32%、次いで40歳代、60歳代が共に19%で、40~60歳代で7割を占めていた。男性が3割、女性が7割であった。健康相談に訪れた人の利用時間帯は、聖路加国際病院の受診帰り、または、仕事の合間に立ち寄りということから、昼休みの時間から午後が多かった。また、83%が「るかなび」を通りがかりに知ったといっており、84%が入りやすいと回答していた(図3)。

4) 市民への広報、立ち寄りのきっかけ作り

「るかなび」の開設準備中から、町内会等近隣への挨拶を始め、店舗にポスターの貼り出しを依頼、また名刺大のカードを置くことを依頼した。このカードには、

「るかなび」での催しや一口健康メモなどを載せている。現在コーヒーショップ、飲食店を中心に、9店舗の協力を得ており、1カ月に1回程度、各店舗を回って、ポスターの張り替え、カードの補充を行っている。

立ち寄るきっかけ作りとして、毎週木曜日の昼にハーブティーの無料サービスを、アロマセラピーに詳しいボランティアの協力を得て、開設当初から行っている。ランチタイムを利用した健康ミニ講座とミニコンサートの企画を現在進めている。

5) 健康相談

開設以来、9月末までに108件の相談ケースがあり、その相談内容は多岐にわたっている。相談時間は5~60分と幅広く、それぞれ個別に対応している。ダブルステートでの血压測定をPRしているためか、血压に関する相談が多く、それをきっかけに他の悩みに発展していくこ

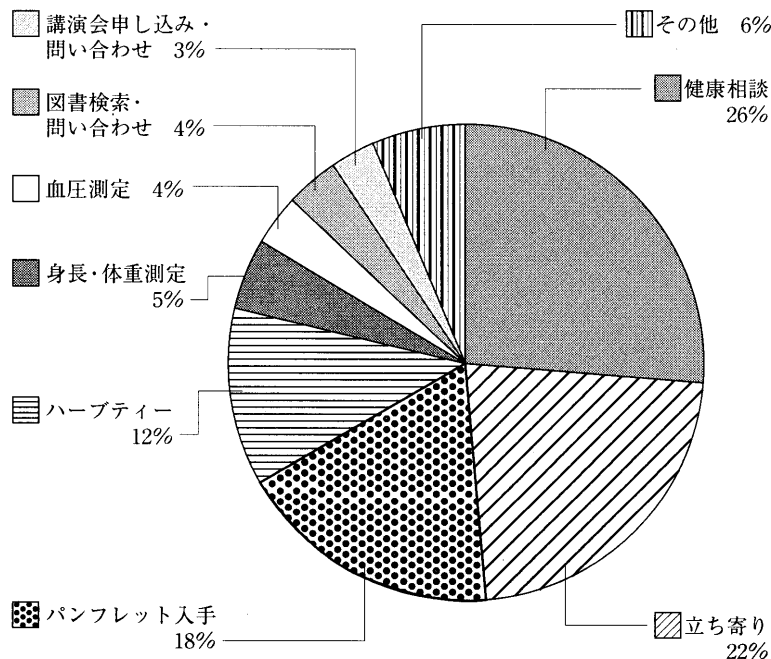


図2 「るかなび」来場者内訳 (2004.5~2004.9)

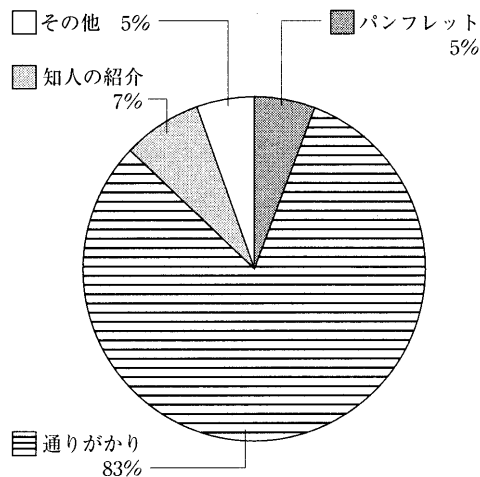


図3 「るかなび」を知ったきっかけ

とも多い。また受診帰りに立ち寄る相談者からは、医師には聞けなかったこと、医療用語や検査値など説明されたが理解できなかったという相談が多い。疾患や薬についてはスタッフが書籍を用いながら、相談者と一緒に調べ、相談者が理解できるように努めている。また、相談者の話を傾聴する時間に多くを費やし、個々に合わせた対応に取り組んでいる。

肺がんによる呼吸苦のため不眠となっている相談を契機に、来訪者の日常生活の工夫を考えるためには、ベッドなどの生活用品を揃えておく必要があると気がつき、10月に寝具メーカーよりベッドの寄贈を受けることができた。相談を受けながら、「るかなび」の内容を日々工夫している段階である。

6) 教育研究機関としての機能

教育の場としての活用は、学生によるパンフレットの作成を現在試行中である。また今年度後期に、看護学部2年生の「生涯発達看護論Ⅱ」の実習場として、学生の受け入れを決定している。学生に対してもヘルス・ボランティアの募集をし、応募もあったが、現在のところ稼働はしていない。

本学の研究から生まれた成果を社会に還元する一つの手段としても、「るかなび」の活用が考えられ、研究によって開発されたケアに関するパンフレット作成を呼びかけているところである。

V. 今後の課題と期待

医療施設内で患者に健康情報を提供する試みは、すでに聖路加国際病院「さわやか学習センター」や東京女子医科大学病院「からだ情報館」等でなされている。また日本看護協会では、平成13年より「まちな保健室」事業を始めている。「るかなび」は地域住民や聖路加国際病院の帰りという来場者は多いが、対象者を特定の病院や地域に限定せず、通りかかった市民に開放していること

は特徴である。これは医療機関でもなく、健康サービス機関でもない大学だからこそ可能なことであろう。どのような反応があるか未知数の中での開設であったが、来場者は順調に増加しており、今後、「るかなび」に寄せられる健康相談の内容を分析し、効果的な情報提供のあり方を考えていきたい。

市民の求めに合った看護サービスの場を大学がもつたことは、これまでの教育機能、研究機能に実践が加わったことになる。「るかなび」が学部学生の学習の場になり、大学院生の実践や研究の場になっていくこと、また教員にとっても同様に教育・実践・研究の場になっていくことが期待される。

開始して半年の試行錯誤の段階であり、人的、物的資源を整えつつ活動しているが、市民の声を直接聞き、市民主導の医療のあり方を学ぶこの上もない学習の場になっている。「るかなび」が市民主導の看護・医療に向かうナビゲーターの役をとれることを望むものである。

本研究は聖路加看護大学21世紀COEプログラム「市民主導の健康生成をめざす看護形成拠点」の一部である。

謝辞：「るかなび」の運用に加わっていただいているすべての皆様に感謝いたします。

引用文献

- 1) プライアント, J.H. 公衆衛生と経済発展—歴史的展望. 埼玉公衆衛生世界サミット. WHO/埼玉県. 1991.
- 2) 菱沼典子, 田代順子, 森明子, 押川陽子, 酒井禎子, 成瀬和子. 日本の都市型保健所における看護活動モデル—プライマリヘルスケアの視点から—. 聖路加看護学会誌. 6(1), 2002, 44—50.
- 3) 菱沼典子, 田代順子, 森明子, 成瀬和子, 酒井禎子, 水野恵理子. 看護の質の確保に関する研究—プライマリヘルスケアに基づく看護モデルの開発—高齢社会における看護モデルの開発. 平成12年度厚生労働省医療技術評価総合研究事業研究報告書. 2001, 39—45.
- 4) 吉川久美子, 佐藤エキ子, 金子美恵, 谷口昌子. 患者の自己学習の場と相談窓口の提供. さわやか学習センター開館の実際. 日本看護管理学会誌. 4(1), 2000, 146—148.
- 5) 佐藤淑子. 新しい患者図書館—東京女子医科大学病院「からだ情報館」. ほすびたる らいぶらりあん. 29(1), 2004, 19—25.
- 6) 日本医学図書館協会ワーキンググループ. 一般市民への医学・医療情報需要調査. 平成13年度厚生科学研究費補助金21世紀型医療開拓推進研究事業「日本におけるEBMのためのデータベース構築および提供利用に関する調査研究」. 2002, 7—15.